

武藤 英明 (むとう・ひであき) 先生

指揮者 (プラハ在住)

桐朋学園大学卒業。齋藤秀雄に指揮を学ぶ。

1976年、チェコのプラハに渡り、ズデニェク・コシュラーに師事する。

1977年、国際バルトーク・セミナーに参加し、最優秀指揮者に輝く。

1986年、プラハ放送交響楽団とサントリーホール・オープニングシリーズで日本デビュー。

1990年、同放送交響楽団と「プラハの春」国際音楽祭に出演。

2004年、名古屋フィルハーモニー交響楽団と再度「プラハの春」国際音楽祭に出演。

2001年～、チェコ・プラハ管弦楽団と毎年日本全国各地で公演。

今までに指揮している主なオーケストラ：

プラハ交響楽団 FOK、スロヴァキア・フィルハーモニー、プラハ放送交響楽団、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団、フランクフルト放送交響楽団、ロシア・フィルハーモニー交響楽団、ネザールランド・フィルハーモニー、国内では、札幌交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、読売日本交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団 などなど

著書：「スメタナ弦楽四重奏団が語るクワルテットのすべて」(音楽之友社)



〈講義概要〉

チェコを中心に世界のオーケストラを指揮し、様々な場で活躍している武藤英明氏が、クラシック音楽と産業についての講義を行った。

講義では、クラシック音楽の聴き比べや武藤氏自身が指揮をする映像の上映など、クラシックに触れる機会が少ない学生にも親しみやすい内容を織り交ぜながら、クラシック音楽の産業としてのあり方を楽しく説明。また、身近な例を挙げながらメディアの無責任さを示し、それに左右されない判断力を持つことの重要性を訴えた。関連して、世の中の現状を、「人間の適量・適正の範囲を守る」という視点から見直すことが必要だと喚起した。

そして、クラシック音楽が300年間継承されてきたことなどから、「百年経っても変わらないものが本物」だと説明。その「本物」を見る目を養うことこそが、先のすべての問題の解決につながっていくことを示した。

〈受講生の感想〉

オーケストラは産業としては赤字なのに、すたることなく、支持されていることにとても驚きました。やはりクラシックは何百年経っても色あせずに人々に感動を与えているし、人々が本当にいい物(=本物)を求めているということだと私は感じました。

京都女子大学短期大学・2 回生

先生が最後におっしゃった、「本物」とは100年経っても生き残る、という言葉が胸に残りました。確かに、「今」話題であったり流行しているものでも何年か経って消えてしまうならそれは「本物」ではないだろうな、と思いました。

立命館大学・産業社会学部・1 回生

オーケストラは私にとって優雅とかお金持ちが聴くとかいうイメージがあったので、黒字のオーケストラはない!と最初におっしゃられてびっくりしました。オーケストラが黒字でなくてもそれによってさまざまな産業に波及する、というのはどのエンターテインメントも同じだなあと思った。

立命館大学・産業社会学部・1 回生

クラシック音楽の偉大な歴史人は今もなお音楽と共にたくさん残り続けている。だけど、普通の音楽の方の偉大な人というのは、そんなに残り続けななと思いました。そういう事を比較して見てみるとクラシック音楽というのはすごいなと思います。

佛光大学・社会福祉学部・2 回生

エンタテインメントはメディアとすごく密接な関係があって宣伝とかすごく影響があることがわかりました。そのメディアをすべて信じるのではなく、本物の目を養って自分で判断し、いいものを聞いていくことが大切だということがすごくわかりました。

京都女子大学・現代社会学部・3 回生

人間の適正・適量の範囲についてのお話。今日、日本でも世界でも適正、適量を超えていると思います。環境問題、人口の問題など...。限界を超えると必ず歪みが出てくるので、今後も様々な問題が出てくると思います。私たち若者が向き合い、解決していかなければならないと改めて感じました。

立命館大学・産業社会学部・5 回生

